STANCE OF THE PARTY OF THE PART

2 0 1 4 . 4

(公社)富山県薬剤師会 広報誌



4号

第36巻 No.297



生 薬 キョウニン(杏仁) 果実が熟す夏に核を取り出し、 風通しの良い日陰で良く乾燥した後、核を割り、種 子を取り出し乾燥する。種子の肉が肥厚し、苦いも のが良品。

成分 amygdalin,oleic acid,linoleic acid,palmitic acid,triglyceride,glycolipid,po等。

効 能 利尿、鎮咳、去痰薬。キョウニン水原料。杏蘇散、神秘湯、清肺湯、麻黄湯、麻杏甘石湯、麻杏薏甘湯 等の漢方処方に配合される。

生薬 アンズ

元富山県薬事研究所 薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

○○表紙について○○

第十六改正日本薬局方ではキョウニンの原植物をホンアンズP. armenica とその変 種のアンズvar. ansu、およびP. sibirica (モウコアンズ)と規定しています。アンズの 原産地を特定することは難しいことですが、現在ではロシア南部、アフガニスタン、中 国西部の山岳地帯原産と考えられています。日本には変種のアンズが中国東部、朝鮮半 島経由で渡来したと推測されています。果肉が比較的薄く、酸味が強いことから生食に 適さず、干し杏やジャム、シロップ漬に加工されています。また、種子は苦味が強く薬用 に適しています。『万葉集』(806)に「杏人」との表記があり、『古今集』(905)に仮名書きで 「からもも」が読み込まれていることから渡来時期は平安時代と推測されています。明 らかに「加良毛毛(カラモモ) |の和名に杏子の漢字を充てているのは『本草和名』(918) や『和名抄』(932)になってからです。同時期の『延喜式』(927、第37典薬寮)に山城国、摂 津国、甲斐国、信濃国より杏仁11斗8升が貢進されていることが記録されています。現 在の単位に換算すると約85ℓとなり、貴族階級が使う薬としては十分な量であったの ではないでしょうか。「アンズ」の名が初めて現れるのは『多識編』(1612)で「加良毛毛 俗云安牟寸 |とあり、また、『大和本草』(1709)には「其花紅梅にをくれ桃に先たつ花うる はしく子は果として食し其内の仁は薬とし又食品に加ふ香味良世俗に杏子唐音をよん てあんづと云仁をあんにんと云]とあり、「アンズ]の語源が記されています。現在では 長野県更埴市等約300haで栽培されていますがメインの果物にはなかなかなれません。

中国においては原産地であることもあって歴史は古く、『神農本草経』の下品に収載され、『名医別録』(502-536)には「杏は晋(山西省)、川の山谷に生ずる」とあり、李時珍は「甘くして沙あるものを沙杏といひ、黄にして酢を帯ぶるものを梅杏といひ、青くして黄を帯ぶるものを柰杏といふ。金杏といふそのものは、大いさ梨ほどあって橘のやうに黄である」と種々の品種があったことを記しています。現在でも中国には生食ができ、仁も苦味が無く、甘みがある甜杏仁と呼ばれる品種があり、杏仁豆腐の原料にもなっています。

一方、中央アジアからカフカス地方のアルメニアを経てトルコ、ギリシアに渡った品種は一説にアレキサンダー大王 (BC356-323)が遠征先から持ち帰ったと伝えられ、1世紀頃のギリシアの医師ディオスコリデスがMailon armeniacon (アルメニアのリンゴ=果物の総称)と呼び、学名の種名に使われるようになりました。後にローマに、14世紀にはイギリスに、18世紀にアメリカに伝わり、現在ではカリフォルニアが一大産地になっています。この品種はホンアンズ、セイヨウアンズ、英名apricot の名で主に生食用に栽培されています。 (村上守一 記)